

奈良県

施設いちごのIPM実践指標モデル

次の管理項目や管理ポイントを例にして、地域の病害虫や雑草の防除状況に応じたモデルをつくりIPMに取り組みましょう。

管理項目	管理ポイント	取り組みの ○×チェック	
		昨年？	今年？
防除計画の作成	栽培開始前に、年間の具体的な病害虫防除計画を作成する。		
農家ほ場における育苗期の病害対策	雨よけ栽培の育苗施設では頭上灌水を避け、立枯性病害（炭そ病、疫病）の感染拡大防止を図る。		
育苗期の資材管理	育苗に用いる培土や資材は、病害虫に汚染されていない清潔なものを使用する。		
育苗期の防除	ハダニやうどんこ病等をほ場に持ち込まないようにするため、育苗期の薬剤防除を徹底する。		
排水対策	ほ場の排水対策に留意し、水はけを良好に保つ。		
施肥管理	土壌診断を行い、適正な施肥を行うことで健全な作物育成を行う。特に急激な肥効、肥料切れは発病を助長するので、品種の特性及び生育に応じた適正な施肥量を守る。		
適正な灌水と適切な換気	施設内が高温・多湿にならないように、適正な灌水と適切な換気を行う。		
病害虫発生予察情報等の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報を入手し、病害虫の発生予測を確認する。		
適正な薬剤の選択	同一系統薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。		
	マルチング直前に粒剤等処理し、少量の薬剤でその後のアブラムシ類の発生を有効に抑制する。		
	病害虫防除所などから病害虫の薬剤抵抗性の発達状況に関する最新の情報を入手し、薬剤を選択する。		
	天敵昆虫やミツバチ等に影響の少ない薬剤を選択する。		

管理項目	管理ポイント	取り組みの ○×チェック	
		去年は？	今年は？
健全な親株の確保	親株は信頼できる経路から入手した、病害虫の感染・寄生がない株を使用し、毎年更新する。		
施設内の病害虫発生状況の把握	施設内を見回るとともに、粘着シート等を利用して病害虫の発生状況を把握する。また、次年度での参考情報とするため、その結果を記録する。		
物理的防除手法の導入	太陽熱消毒を実施し、土壌中の病害虫の密度低下を図る。		
	病害虫の発生がみられた株や、収穫残渣等は早期に除去して施設から離れた場所に埋設するなど、感染源にならないように適切に処分する		
効果的な農薬使用	薬剤散布にあたっては、下葉かき作業後に行うなど、病害虫の発生部位に薬剤が十分かかるようにする。		
飛散防止	薬剤散布の際は、施設を一時的に閉めるなど、適切な飛散防止措置を講じる。		
作業日誌	病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等の栽培管理状況を記録する。		
研修会への参加	県や農協などが開催する栽培講習会、IPMや農薬安全使用に関する講習会などに、年に1回は参加する。		